

津軽地方の「人形ねぷた」と中国・台湾の「花燈」の制作技法の比較分析

三浦俊一

Comparative Analysis of the Production Techniques of Doll Shaped Lantern Neputa in the Tsugaru Region and Hua Deng in the China and Taiwan Syunichi Miura

本稿では、津軽地方の「人形ねぷた」と中国・台湾の「花燈」の両者の制作技法を比較して分析を行うことを目的とする。筆者は、これまで、津軽地方の人形ねぷたの技法分析を行い、東北芸術文化学会学会誌第15号から第19号において、4つの論文に分けて報告を行ってきた。本稿は、これまでの分析に基づきながら、津軽地方の人形ねぷたと中国・台湾の花燈の両者を比較して分析するものである。

本稿の比較分析の対象である「人形ねぷた」は、ねぷたと呼ばれる燈籠の様式のひとつである。このねぷたという燈籠が祭りの主役となるねぷた祭りは、青森県津軽地方で行われている夏季の祭事である。

ねぷたと呼ばれる燈籠の様式は、本稿の分析対象である三次元の立体造形で構成される人形ねぷたと、二次元の平面描写を扇型の立体構造に構成した扇ねぷたとがある。

一方、もう一つの比較分析の対象である、中国・台湾で制作されている「花燈」は、旧正月から15日目を示す「元宵節」の際に、新春を祝う縁起物として用いられる燈籠の様式である。地域によって「花灯」、「燈彩」や「灯彩」と表記が異なるが、本稿では、「花燈」という表記に統一して用いることとする。また、元宵節に用いられる燈籠には、様々な形状のものがあるが、本稿では、「灯会」や「燈會」という催しの中で用いられている人形をかたち作った「花燈」を分析対象とする。

本稿での比較分析の要旨は以下である。

制作される題材では、人形ねぷたが「勇ましさ」を表現する事例が多いのに対し、花燈では新春を祝う「縁起物」を表現する事例が多いことが明らかになった。

骨組の制作では、材料や固定方法の違いを整理した。また、デフォルメを人形ねぷたでは多用するのに対し、花燈では写実的な表現を重視し、デフォルメをあまり用いないことが明らかになった。さらには、針金のねじれをコントロールして流線的に骨を組む技法を、花燈の方がより多用することを特筆した。

内部照明の設置では、材料の類似点を整理した。一方で、LED照明ケーブルの設置個所と、「点滅」表現の効果については、花燈の固有の表現であることを特筆した。

表面の貼り付け材料では、人形ねぷたが和紙、花燈が布材であるという違いが、他の作業工程にも大きな影響を与えていることを指摘した。

彩色では、用いる塗料の違いを整理した。特に、墨つまり黒色を人形ねぷたでは多用し、明暗のコントラストを強調していることを明らかにした。

また、台座の有無や、防水加工の進化の違いについても明らかにした。

本研究は、今後も調査を継続的に行い、様々な地域の燈籠様式の比較分析を進める予定である。また同時に、東アジア各地の燈籠様式技法の交流促進に努める所存である。

本稿は、日本学術振興会科学研究費助成事業である「日本および東アジアの人形燈籠 (lantern) 制作技法の比較分析」(研究課題番号 25770055) の研究成果の一環を報告したものである。